フレームに見られる文化的差異

—台日の大学生によるグループ討論—

陳 明 涓

1、研究動機

母語以外の言語を学習する時に、困難と出会うことは誰でも経験したことがある。しかし、同じ学習を阻害する問題でも、例えば言語能力の不足による間違いのように、分かりやすい形を持っているものもあれば、解釈不能とされてきたものもある。そして、上級レベルの学習者が悩まされている問題の多くは、この後者である。

フレーム（Frame）は言葉通りに「枠組み」を意味している。私達は育った環境から、フレームを学び、そして形成しているため、フレームには社会的、文化的要素が多く含まれている。言い換えれば、同じ背景要素を持っている人達では、フレームは暗黙の了解のように実現されているため、気づかない場合が多い。しかし、それも異文化交流によって気付かれ、重要視するようになった。そして、異文化の接触が頻繁になっている現在、言語教育の他、日常生活の認識としても、フレームの解明は必要である。

フレームに関する研究の中で、Watanabe（1993）は日本とアメリカの大学生を対象にし、3つの結果(注1)を提示した。しかし、同じことは台湾と日本の大学生の間にも存在しているはずである。そこで、本研究は台湾と日本の大学生を対象にして、考察を行った。

2、実験方法

本研究が学生のグループ討論に注目したのは、勉学を目的としている学習者にとって、「グループ討論」は必要不可欠な存在と考えたからである。そして、それは日常生活の「話し合い」にも深く関わっている。

実験方法はWatanabeの方法を参考にして、母語話者同士を男女2人ずつ4人のグループを作り、予めに準備した3つのテーマ（注2）について、母語で討論してもらった。今回の実験はビデオを使っていないため、分析データは音声テープの文字化資料のみである。

グループの数は台湾グループ10組で、日本グループ5組。そして、実験参加者はいずれも各自の国の大学、又は大学院に在学している学生であり、平均年齢は21.6才である。

3、分析と考察

本研究は前述した実験方法に基づいて、台湾と日本の大学生が行うグループ討論を分析した。そして、両者の相違点を次の5つにまとめた。

3－1、討論の開始

録音は、依頼者が時間とテーマを参加者に説明する時から始めたため、この開始部分は参加者が「普通の雑談」から「討論活動のフレーム」に入る一番始め、そして重要な部分とも言える。その上、各グループが「討論」活動に対する認識の解明に繋がることも考えられる。

まず、分析の便益上、討論開始の部分を「依頼者の最後の発話（以下RUと略す）」と、「実験参加者の討論内容に関する最初の発話（以下DUと略す）」に分けた。具体的に言うと、依

頼者が言う「じゃ、お願いします」や「どうぞ」などがRUで、実験参加者がテーマを読み上げたり、答えたりする発話がDUである。そして、このRUとDUの間に注目して、まとめたのが表Aである。

表Aで示したように、台湾グループと日本グループには大きな違いがあった。台湾グループはRUとDUの間に何も挟まない①の形が多いのに対して、日本グループの多くは討論構成に関する発話を挟む③の形を取っている。

言い換えれば、台湾グループは構成に関心がなく、討論内容に素早く入っていくが、日本グループは内容より、まず構成を気にしている。日本グループの部分はWatanabeの指摘と一致したとも言えよう。

・表A

	台湾	日本
1、何も挟まない、 RU→DU	8/10	0/5
2、短いポーズを挟む RU→ポーズ→DU	2/10	1/5
3、討論の構成に関する発話を挟む RU→構成→DU	0/10	4/5

(該当するグループ数／総グループ数)

3−2、テーマの移行

実験は各グループに3つのテーマを与えて、討論する事である。そこで、討論内容が前のテーマから次のテーマへの変わる過程を「テーマの移行」と呼ぶ。具体的には、前テーマの内容を含む最後の発話と次のテーマ内容に入る最初の発話を目印にした。そして、台湾グループと日本グループのそれぞれに存在するのパターンを見出す事が出来た。次の図1と図2がそのパターンである。図の中の実線の囲みは不可欠と思われる部分で、虚線はそうではない部分を示している。

＜図1：台湾グループの移行パターン＞

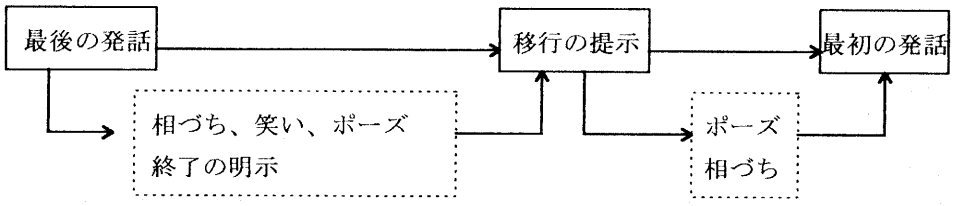

図1

<図２：日本グループの移行パターン>

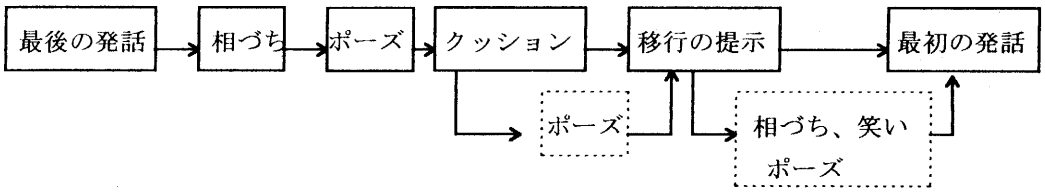

図２

日本グループのパターンと台湾グループのパターンと比べて、まず気づくのは実線の部分の多さである。そして、その他に注目すべきのは、「クッション」と書いている部分である。

図２では、簡単に「クッション」と書いているが、実際では「前の話者への気遣い」「意見のまとめ」或いは「移行の理由」などがある。例で説明すると、例えば、日本グループの参加者はポーズの後に、「時間もあれだし、とりあえず」のように、移行の理由を挙げたり、又は「このぐらいですね」「ここは別にまとめなくてもいいかな」のように意見をまとめ、或いはまとめようとする。

これは、移行が唐突すぎないように、ワンクッションを置いてから、目的を果たそうと言う日本グループの気持ちの表れだと考えられる。

以上の結果をまとめると、台湾グループの移行パターンは簡単明快で、移行提示の契機は多様であり、派生形も多いが、日本グループはかなり整ったパターンを持っている。

3－3、ポーズ

今回の実験で、ポーズに関して特に目立ったのは、長さである。台湾グループのデータでは、殆どのポーズは 0.7～1.5 秒のもので、5 秒以上のポーズは極めて少ない。一方、日本グループのポーズはやや長めで、1.5 秒以上なものが多い他、5 秒以上のポーズもかなり存在している。例えば、3－2 で示したテーマ移行の部分でも、移行直前にあるポーズだけ見ると、台湾グループの平均は 1.58 秒で、日本グループの平均は 2.99 秒である。

日本人の沈黙に関して、小西（1995）は沈黙を種類別に分けて、その長さの平均を出している。その結果によると、話題の転換以外の沈黙の平均は、1.0～1.4 秒で、話題の転換に関係あると思われる沈黙の平均は 2.5 秒である。そして、その沈黙の平均は後半になると、つまり、転換に近づくと、更に長くなり、2.75 秒になる。今回の実験で選られた数値はこの小西(1995)の研究とかなり近いと言えよう。

3－4、順番

発話の順番に関して、日本人のグループは年少者から年長者へ、女性から男性へというやり方をしていると Watanabe は指摘した。今回の実験では、被験者の年齢が近いため、この点についての考察は出来なかった。しかし、逆に年齢差がないため、今回は別の観点から、順番の持つ意味が見られた。

＜例１＞

X：･･･（略）だから、他の言語を大学に来て覚えようなことは一切思っていませんでした。

A：ああ、これはいいサンプルでしたね。

X：うん、

@@@@

ポーズ(1.5 秒)

B：で、次に、あ、A さんは、

A：私は･･･（略）　　（X、Y＝男性、A、B＝女性、@＝笑い）

例１は、テーマ１の部分から取り出したものである。テーマ１の目的は「参加者全員が順番に自分の決定を述べる」ことである。つまり、順番が決めてあれば、その順番に従って発言すればいいし、決めてなくても様子を見て、自分から言い出せばいい。しかし、例１のＡはポーズがあるのにも係らず、自ら名乗らないで、他の参加者Ｂからの指名を待っていた。そして、開始の部分も含めて、テーマ移行後、日本グループの参加者は必ず他の人を指名している。自分から最初に意見を言い出す事は、全データを通して一例もなかった。

一方、台湾グループは自分から名乗りをあげて発言することに対して抵抗を感じない他、テーマ移行後も率先して自分の意見を述べている。

3－5、トピック

テーマ３は「例を挙げてお互いに話し合うこと」を目的としている。つまり、この部分は参加者が自由にトピックと提出し、会話の流れを作ることができる。今回はテーマ３の自由な部分を利用して、各グループが提出したトピック間の関係について観察した。

＜図３：日本のブーメラン式＞

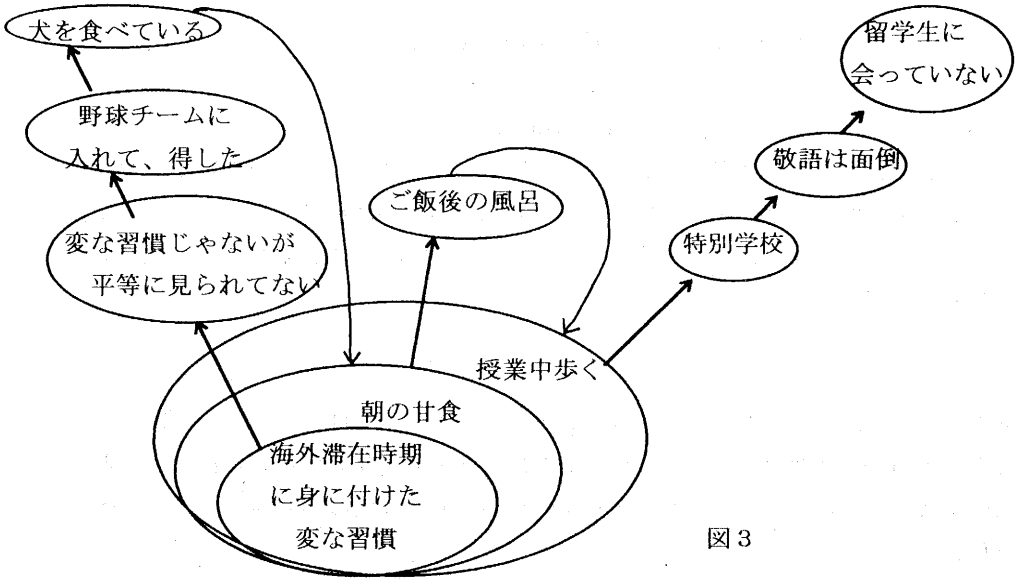

図３

＜図４：台湾の連想ゲーム式＞

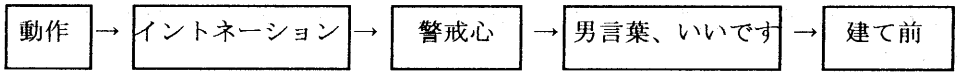

図４

まず、台湾グループでも日本グループでも、トピックの間には関連性があるが、両者の違いは、台湾グループは連想ゲームみたいに、関連しながら前へ進む（図４）が、日本グループはブーメランみたいに、進むと同時に戻ってくる（図３）点にある。

例えば図３で示した例のように、このグループがテーマ３について討論を行う時、話しは再三に「海外滞在時期に身に付けた習慣」に戻っている。例えば、最初は「変な習慣」から「日本人は犬を食べていると言われて不快だった」へと、トピックを転換していったが、ここで、まず一回目の逆戻りが行われた。それから、又トピックを転換して、「ヨーロッパでは食事後の風呂は体に悪いそうで、食事前は煩く風呂に入ろうと言われた」という話まで行ったが、ここでも、逆戻りが行われたため、トピックは再び「変な習慣」に戻っていった。このように、日本グループはブーメランのようにある発話内容に戻っていくという傾向が見られる。

一方、台湾グループの関連性は日本グループと比べたらやや薄い他、かなり急な転換もしている。これは連想ゲームと言えない場合もあるが、日本グループと違うのは、線状的にトピックを転換していることである。

以上、＜図３＞と＜図４＞で示したように、トピックの転換について、両者はかなり違ったフレームを持っている。日本人は、このブーメラン式のフレームが働いているため、外国人に、同じトピックでグルグル回っているという一般的な印象を作ったと思われる。

４、まとめ

同じ「グループ討論」でも、台湾の大学生と日本の大学生がそれぞれ違うフレームを持っていることは今回の実験で明らかになった。それは討論の構成に対するこだわり、テーマ移行の方法、ポーズの長さ、発言順番の意味、そしてトピックの運び方に現れている。

この結果によって、私達は日本人と台湾人が一緒に討論を行う時に出合った問題、或いは感じた違和感を説明する事が出来る。例えば、ポーズの長さに対する感覚が違うため、日本人は台湾人の移行や発言の唐突さに戸惑いを感じたり、自己中心的だと誤解するかも知れない。逆に、台湾人は日本人のポーズの長さに不安を感じたり、参加意欲が低いと捉える可能性もある。

今後の課題として、まずは turn-taking の形や論点の構成、そして討論の進行役の役割について考察したい。討論フレームの解明は単に授業中や正式の場での討論にしか役立つのではなく、一般的な「話し合い」にも有意義な結果をもたらすことができる。

＜注釈＞

注１：Watanabe(1993)が提示した３つの結果。

１、日本人グループは形式を重視しているのに対して、アメリカ人グループは内容を重視している。

２、日本人グループの参加者は物語を語るように、時間軸に沿って物事を述べるが、一方、アメリカ人グループはレポーターするように簡潔に述べる。

３、日本人グループの参加者は複数の論点を持って、討論に参加しているが、それに対して、アメリカ人グループの参加者は単一の論点で討論に参加する。

注２：今回の実験で、被験者に与えた３つのテーマは以下のようである。

１、あなたはどうして今の大学、又は学科を選んだのですか。

２、「日本人にとって、英語は学習しにくい言語だ」という見方について、あなたはどう思いますか。賛成ですか、それとも反対ですか。賛成か反対の理由を述べてください。

３、言葉や習慣の違いが原因で外国人（留学生）との間に感じた不快感、或いは生じた誤解を挙げて皆で討論してください。

台湾グループにはこれと同じ問題を中国語に訳して与えた。只、テーマ２の部分は「中国人にとって、日本語は英語より学習しにくい言語だ」というように変更を行った。

＜参考資料＞

・Watanabe,S. 1993. Cultural Differences in Framing : American and Japanese group Discussions. In Framing in Discourse . Tannen,D.(ed.) New York : Oxford University Press.

・小西光子 1995 「会話における沈黙と話題転換」『平成７年度日本語教育学会秋季大会予稿集』